

学習のねらい

- ① 古文を解釈する
② 事実関係をとらえる

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

今は昔、小野宮殿の御子に、少将なる人おはしけり。はかなくわづらひて亡くなりければ、小野宮殿、泣きたまふこと限りなし。さて、この少将の乳母、夫に従ひ、陸奥国に行きたりけるが、少将亡くなりて三月ばかりになるほどに、若君かく亡くなりたまへりともつゆ知らで、恋しくわびしきことを書いて①*御文参らせたりけり。返り事、小野宮殿ぞ書いてつかはしける。「その人は、このほどに、はかなくわづらひて亡くなりにはかば、我、今まで生きたることをなむ、心うく覚ゆる。」とばかり書いて、歌をなむ詠みてつかはしける。

② まだ知らぬ人もありけり 東路に我も行きてぞ過ぐべかりける

〈「古本説話集」より〉

(注) 乳母＝母親の代わりに、子に乳を飲ませ養育する女性。

陸奥国＝今の東北地方。

御文参らせたりけり＝お手紙を差し上げた。

□ ① 線①「御文参らせたりけり」とありますが、その「文」には何と書かれていたと考えられますか。三十文字以内(句読点も字数に数えます)で答えなさい。

□ ② 線②「東路に我も行きてぞ過ぐべかりける」とありますが、これは

「東路に私も行って過ごせばよかったなあ」という意味です。なぜこのように言ったのですか。その理由を、四十字以内(句読点も字数に数えます)で答えなさい。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。ただし、段落③・⑤・⑦は古文です。

① 車という男はそれほどの資産もないのに大酒飲みで、まくらもとの樽に酒を絶やすことがなかった。

② ある夜、目が覚めると、かたわらに一匹の狐が泥酔して眠っていた。樽をのぞくと一滴も残っていない。車は笑って、「①これ我が酒友なり。」と言っただけで、また狐のそばに身を横たえていた。すると、夜半に目覚めた狐は、卑しからぬ身なりの好男子に姿を変えた。

③ 起きて 牀前に拝し、②不殺の恩を謝す。車いはく、「我酒に癖ありて、人もって痴となす。汝は我が 鮑叔なり。もし疑はれずんば、まさに 糟丘の良友となるべし。」と。引きて牀に登らしめ、また寝たり。

④ 次の日、狐の来訪を心待ちにしていたところ、夕方はたしてやって来たので愉快に酒を酌み交わした。

⑤ 狐は量豪にしてよくなひ、ここにおいて ③相得ることの晩きを恨む。狐いはく、「しばしば良酒をみだりにし、何をもって徳に報いん。」と。車い

はく、「斗酒の飲、なんぞ＊齒頰を置く。」と。狐いはく、「しかりといへども、君は貧士にして、＊杖頭の錢すら大いに易からず。まさに君のために少しく酒資を謀るべし。」と。

⑥ 狐の教えてくれた場所へ行くと金が落ちており、その金を夜の酒盛りの足しにした。更に狐は中庭の裏手に穴蔵があるので開けてみるようにと告げた。

⑦ その言のごとくするに、はたして錢百余千を得たり。喜びていはく、「＊囊中すでおのづからあり。みだりに買ふを愁ふるなかれ。」と。狐いはく、「しからず。④＊輶中の水なんぞもって久しく掬ふべけんや。」と。

⑧ その後も狐はつきつきと車に利益をもたらし、車は広大な田畑を所有するようになった。狐は車の家族とも親しく交わったが、車が亡くなるとふつり訪ねて来なくなった。

△「聊齋志異」より△

(注) 牀||ベット。

鮑叔||心友。

糟丘||酒。

齒頰を置く||遠慮し気を使う。

杖頭の錢||酒代。

囊||袋、財布。

輶||車が通ったあとに残る、車輪の跡。

□(1) ———線①「これ我が酒友なり」とありますが、なぜこう思ったのですか。二十字以内(句読点も字数に数えます)で答えなさい。

□(2) ———線②「不殺の恩を謝す」とありますが、「車」「狐」ということばを

必ず用いて、二十字以内(句読点も字数に数えます)で現代語訳しなさい。

□(3) ———線③「相得ることの晩きを恨む」とありますが、「お互いに」という書き出しで、三十字以内(句読点も字数に数えます)で現代語訳しなさい。

□(4) ———線④「輶中の水なんぞもって久しく掬ふべけんや」とありますが、これは「車輪の跡のくぼみにたまったわずかな水を、どうしていつまでも掬い続けることができるでしょう」という意味です。「狐」はどういうつもりでこう言ったのですか。「酒」「金」ということばを必ず用いて、三十字以内(句読点も字数に数えます)で答えなさい。

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

昔、正直なる人と虚言（そせごと）をのみいふ人とありけり。この二人、猿のある所に行きけり。しかるに、ある木のもとに、猿ども（す）数多（す）並み居て、中に秀で、おのおの敬（うやまつ）し猿あり。かのうそ人、猿のそばに近づきて、例のうそを申しけるは、「是（これ）に気高く、見えさせ給ふは、* ましら王にて、* 渡らせ給ふか。その外、* 面々見えさせ給ふは、* 月卿雲客（つきけいうんかく）に渡らせ給ふか。あないみじきありさま。」とぞほめける。ましらこの由を聞きて、「憎き人のほめやうかな。是こそ真（まこと）の帝王にておはしませ。」とて、引出物（ひきだすもの）などしける。

しかるを、かの正直なる者思ふやう、「これは①うそをいふにだに引出物出したりければ、真をいはんに何しかは得ざらん。」とて、かの猿の辺（へた）に行きて申しけるは、「面々の中に、年たけ齡衰（よは）へて、首の剃（は）げたるもあり、さかんにしてよく、* 物まねするべくもあり。」などぞ、ありのままに申しければ、ましら大きに怒つて、猿どもいくらかもむさぶりかかつて、遂（つひ）に掻（か）き殺しぬ。

そのごとく、人の世にある事も、こびへつらふ者はいみじく栄え、素直なる者はかへつて②害を受くる事あり。③この儀をさとつて、④素直なる上にまかせて悔ゆる事なかれ。

〈伊曾保物語〉より

(注) 数多（す）＝たくさん。

見えさせ給ふ（たま）＝お見えになる方。

ましら＝猿。

渡らせ給ふ（たま）＝いらっしやる。

面々＝皆さん。

月卿雲客（つきけいうんかく）＝身分、位の非常に高い人。

物まねするべくもあり＝物まねできるものもある。

□ (1) — 線①「うそをいふにだに引出物出したりければ、真をいはんに何しかは得ざらん」とありますが、これを四十字以内(句読点も字数に数えます)で現代語訳しなさい。

□ (2) — 線②「害を受くる」とありますが、この前の話では、どんな「害」を受けましたか。具体的に十五字以内(句読点も字数に数えます)で答えなさい。

□ (3) — 線③「この儀」とは、何を指していますか。「〜という」という形で、四十字以内(句読点も字数に数えます)にまとめて答えなさい。

□ (4) — 線④「素直なる上にまかせて」とありますが、これを十五字以内(句読点も字数に数えます)で現代語訳しなさい。

4 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある所に強盗入りたりけるに、* 弓とりに法師をたてたりけるが、秋の末つかたのことにてはべりけるに、門のもとに柿かきの木きのありける下に、この法師* かたて矢はげて立ちたる上より、熟柿うみかきの落ちけるが、この弓とりの法師がいただきに落ちて、つぶれて散々さんざんに散りぬ。この柿のひやひやとしてあたるを、かいきぐるに、なにとなくぬれぬれとありけるを、はや射られにけりと思ひて、* 臆おそしてけり。かたへの輩ともがらに言ふやう、「はやく痛手を負ひて、いかにも * 延ぶべくもおぼえぬに、①この頸くびうて」と言ふ。「いづくぞ」と問へば、「かしらを射られたるぞ」と言ふ。さぐれば、なにとは知らず、ぬれわたりたり。手に赤く物つきたれば、げに血なりけりと思ひて、「* さらんからにけしうはあらじ。ひきたてて行かん」とて、肩にかけて行くに、「いやいや、いかにも延ぶべくもおぼえぬぞ。ただはや頸を切れ」と、しきりに言ひければ、言ふにしたがひてうち落としつ。さて、そのかしらを包みて、大和の国へ持ちて行きて、この法師が家になげ入れて、しかじか言ひつることとて、とらせたりければ、②妻子泣き悲しみて見るに、さらに矢の跡なし。「* むくろに手ばし負ひたりけるか」と問ふに、「しかにはあらず。このかしらのことばかりをぞ言ひつる」と言へば、③いよいよ悲しみ悔ゆれどもかひなし。臆病はうたてきものなり。④さほどの心ぎはにて、かくほどの* ふるまひしけんおろかさこそ。

(注) 弓とり 弓を持った見張り。

かたて矢はげて 一筋の矢を弓につがえて。

臆してけり おびえてしまった。

延ぶべくも 生き延びられるとも。

さらんからにけしうはあらじ かといい、たいしたことはないだろう。

〈古今著聞集〉より

むくろに手ばし負ひたりけるか 身体に傷を負ったのですか。
ふるまひ 行動。

□(1) 線①「この頸うて」とありますが、なぜこのように言ったのですか。二十五字以内(句読点も字数に数えます)でわかりやすく説明しなさい。

□(2) 線②「妻子泣き悲しみて」とありますが、これは「法師」の死を悲しんだものと考えられます。では、そのあとの 線③「いよいよ悲しみ」とは、何を悲しんだものと考えられますか。二十字以内(句読点も字数に数えます)で答えなさい。

□(3) 線④「さほどの心ぎはにて、かくほどのふるまひしけんおろかさこそ」とありますが、「さほど」「かくほど」が何を指すか明らかにしながら、この部分を三十字以内(句読点も字数に数えます)で現代語訳しなさい。
